

『東アジア近代史』第一五号 括刷

「対支文化事業」における人物と学術調査
—橋川時雄を中心として—

林志宏

(吉井文美訳)

一〇一二年三月三一日 ゆまに書房

《論文》

「対支文化事業」における人物と学術調査 —橋川時雄を中心として—

林志宏
(吉井文美訳)

はじめに

日本は明治維新以降、積極的に对外发展を追求し、中国はその経略目標の一つとなつた。特に第一次世界大戦開戦の後、欧米各国が東アジアの政治と軍事的利益に関心を払う余裕のない間に中国への介入を加速させ、その影響力を拡大させる。政府が策定した外交政策のほかに、民間でも次々とさまざまな結社が組織され、機運に乗じて中国問題を研究する団体が多数生まれた。それらは中国各地に点在し、各々考察や調査を進め、日本の中国侵略の過程において重要な役割を果たし、一種無形の武器と化したのである。

中国に関する組織的調査の実施について、日本は決して悪例を開いた国ではない。欧米各国は十五世紀

から布教と通商を目標に、世界各地に拡張するとともに帝國の利益達成を追求し、それに付随して多くの調査事業や関連する専門知識が生み出された。人類学を例にとれば、かかる学知の出現は、まさに植民時期における異文化の風俗と習慣に対する理解と、密接に関係している⁽¹⁾。十九世紀の中国は西力東漸の下におかれ、西洋人は中国に関する様々な調査を開始した。著名な英國王立アジア協会華北支部は、一八五九年に上海居留民によって創設された機構である。同会は欧米各国の人士から成り、その目的は「中国の各事情を調査研究」するところにあつた。

他方で、日清・日露戦争の勝利と国際的な外交環境の変化ゆえに、戦前日本が中国に対して行つた調査はヨーロッパ帝国のそれとは性質において異なつた。まず、地理的力

テゴリーに基づいて成立した日本の「東洋学」は、現代科学に依拠した研究方法と態度を強調した。「東洋学」は「漢学」の伝統とは異なり、一次史料の整理の後に社会の考察・検証を行うことを重視するのに加え、アジア諸民族の歴史と文化の関係について探求を試みている。⁽³⁾次に、二十世紀初めの民族自決の潮流のなかで、「アジア的価値」を追求する点にも、日本の学術調査の特色があつた。特に一九二〇年代の「ワシントン体制」は、日本外交や植民地への拡張の試みを制限した。そのため日本では、ヨーロッパの霸権に抵抗する必要性から「アジア主義」の言説が登場した。⁽⁴⁾このような特色を有する政府の政策に呼応するため、多くの調査員・旅行者が東アジア各地に赴き、社会調査に従事した。

原覚天の分析によれば、中国に関する研究と調査グループ調査群の構成員には四つの類型があつた。第一は、帝國大学の系統に属する東洋史研究者である。第二は、長期間中国に居住し、中国人と密接に交際して彼らに親近感を持つていた「中国研究者」である。第三は東亞同文書院の出身で、中国語に精通した学者である。最後は、直接に農村実態調査へ参与した調査員である。⁽⁵⁾また、彼らの調査に基づき誕生した大規模な資料集や報告書は、これらの調査グループの最も重要な成果となり、現在にまで及ぶその影響

は看過できない。

本稿は個別事例の分析を通して、日本の対中学術調査の特色を探求するものである。ここで筆者は、かつて中国に三十年近く住み、伝統的な漢学をかねてから研究していた学者である、橋川時雄を検討対象として取り上げる。橋川は福井県出身で、一九一三年に地元の師範学校を卒業し、何年間か小学校教師を務めた。そして一九一八年四月、自身で中国に渡り、大連、天津を経て北京に居を構えた。⁽⁶⁾日本に帰国したのは戦後である。

筆者が橋川時雄を取り上げるのは、以下の理由に拠る。

第一に、橋川は生前、「対支文化事業」と密接な関係を持つていたからである。彼は東方文化事業総委員会（以下「東方文化会」と略す）の仕事として、北京の人文科学研究所で責任者であった。東方文化会は、一九二〇年代半ば日本が団匪賠償金をもとに、「敦親善隣」を目的とした文化事業を始めた際に成立した。同会については、すでに少なからぬ研究が蓄積されている。例えは、王古魯、河村一夫、王樹槐、黃福慶などが先駆的研究を行つており、近年では蕭緒興、阿部洋、山根幸夫などの研究がある。⁽⁸⁾これら先行研究の基礎の上に立つことによつて、筆者の分析課題はより深まると考える。

第二に、最近の関連資料の整理と公開の進展が挙げられ

る。これにより橋川の役割は日増しに明確になり、我々が戦前日本の「学術調査」の影響を理解するに足るものとなつた。例えば、今村与志雄が編纂した『橋川時雄の詩文と追憶』は多くの文章と逸話を収めており、またアジア歴史資料センターで公開されている史料や、新たに発見された橋川の中国時代の書簡等により、日中文化交流の一側面の再考が可能なのである。

最後に最も重要なこととして、橋川が自ら編纂に関わっていた二冊の書籍、『続修四庫全書総目提要』（以下「続修提要」と略す）と『中国文化界人物總鑑』（以下「人物總鑑」と略す）は、「学術調査」の角度からいかに評価できるのか、またそれらがもたらす歴史遺産および意義とは何であるのか、を探究する必要からである。

一、橋川時雄と中国「五・四」後の

新旧思想勢力

北京に渡った当初、橋川時雄は「大日本支那語同学会」にて中國語を学び、北京大学で聽講したほか『順天時報』の翻訳記者も務めた。『順天時報』は、近代日本が中国に対する世論を形成した新聞の一つであり、一九〇一年一二月に創刊された。創刊者の中島真雄は、もともと東亜同文会福州支部長で、のちに華北地区で活動した。中島は「支

那」の保全により中国と朝鮮の関係を改善し、両国の時事を討論することで世論を喚起しようという思想を持った人物である。日露戦争と民国初期の袁世凱の施政期において、『順天時報』の言論は基本的に日本政府の政策に同調していた。⁽⁹⁾ 翻訳記者を務めた経験は、以下の二点で橋川に深い影響を与えた。一つ目は、中国情勢の変化を素早く把握し、各地の風物や民情を明瞭に理解できるようになったことである。もう一つは、記者の肩書きを通して、学術界と知識階級の重要な人物との交流が可能となつたことである。なかでも特筆すべきは、「五・四」学者との交際であろう。

一九二〇年代初め、新文化運動が発展の兆しを見せ始めたころ、「五・四」学者は新聞や雑誌を足掛かりに華北文界での発言権を強めた。「五・四」運動を経験した橋川時雄もその雰囲気をよく観察していた。このとき橋川は「五・四」学者と主体的に連絡を取り、交流を深め、有名な学者の著作を翻訳した。例えば梁啟超の『清代學術概論』を橋川は一九二二年に翻訳し、同書は翌年東京で出版された。時を同じくして、橋川は自ら胡適を訪問し、胡の『五十年來中國之文學』を翻訳する意思を伝えている。⁽¹⁰⁾ 後に胡適は『申報』に書いたこの作品を、『輓近の支那文學』と改題して出版した。さらに橋川は、翻訳版を日本語に精通した周作人に贈り、批正を請うていていることから、自分の

作品に大変満足していたことが分かる。⁽¹¹⁾ 胡適はこの日本語版の序文で、「大した著作とはいえない」と謙遜し、「橋川氏はなんとそれを日本語に訳してくれた。本当に私は慚愧に堪えない」と記しているが、胡適の態度は、橋川を相当重視したものだと言える。⁽¹²⁾ 胡適と橋川の関係は、恐らくこの一事に止まらないだろう。一九三四年六月一三日の胡適の日記に、以下のような一節がある。

橋川時雄は鈴木大拙を宴に誘い、錢稻孫、湯錫予、徐森玉と私が陪席した。橋川は私に常盤大定の『宝林傳之研究』を一冊送つてくれた。それには日本で発見された『宝林伝』第六巻の影印本も附されていた。私はそれを持ち帰り読んだ。

しばらくして胡適は橋川の紹介により、大連にある満鉄本社で講演も行つた。⁽¹⁴⁾ これら二つの事例は、ともに橋川の活動の性質を説明している。すなわち彼は中国知識界の学者と交流を持つたばかりか、さらに日中文化交流の仕事をも担つたのだ。

そのほかに「五・四」学者と橋川の関係を説明するもの

として、吳虞との交友も注目に値する。吳虞は当時人々に「片手で孔家店を打つ老英雄」と称され、陳獨秀・胡適とともに反儒教運動を起こして一世を風靡した。一九二〇年代の『吳虞文録』の読者とその売上げには目を見張るもの

がある。研究者によれば、少なくとも六刷され、国内では柳亞子、郁達夫、康白情など新旧名士が呼応し、国外でも青木正児、本田成之、鶴見祐輔などの学者が同書を宣揚した。⁽¹⁵⁾ 一九二三年八月、『順天時報』文芸欄の編集責任者であった橋川は、日本人の友人に仲を取り持つてもらい、吳虞に寄稿を依頼している。その後、謝意を表するために、橋川は自ら手紙を書き、「私は一読して蒙を啓かれました。それはまさに紙面に一筋の光をさすようであり、欣喜雀躍しました」などと綴つた。⁽¹⁶⁾ 公の場のみならず、橋川と吳虞は私的にも交流している。それは学術情報の交換や、他人の学問研究の評価、さらには家族ぐるみの付き合いにも及んでいた。その深い情誼ゆえに、橋川は様々な機会を捉えては日本の学者と吳を引き合わせた。吳の日記には、以下のように記されている。

服部宇之吉、朝岡健、島田才次郎…が前後して到着し、合計二十人ほどが集まつた。服部は私に会うなり、私のことをかねがね聞いており、東京ですでに『文集』を買って読んだと言い、私は服部と長時間話しをした。小村も私を知つていた。楊遇夫が通訳をしてくれ、『文録』六冊を日本の友人にそれぞれ贈つた。八時に帰る。⁽¹⁸⁾

ところで、『順天時報』は橋川の人間関係に、どの程度影響を与えていたのだろうか。その答えは、同報二十周年

の七千号記念号に表れている。同号には、黎元洪大總統の題字である「聞者足戒」のほか、政界や軍、学会やマスコミなどからの多くの人士、例えば靳雲鵬、吳景濂、顏惠慶、黃郛、著名な学者である王国維らの祝辭が掲載されている。購読者の投稿欄ですら橋川への言及を忘れず、「新編輯長橋川先生におかれては貴紙を大いに改革され前途洋洋々なり」と賞賛した。⁽¹⁹⁾

しかし橋川にとって、彼を感服させ、かつ深い学識と情誼を有していると認めるのは、新派の学者ではなく、伝統や旧学に素養のある老輩たちであつたかもしれない。橋川は中国に渡つて以降、常に老輩たちの学問を衷心敬慕し、彼らとの交流を楽しんだ。一九二〇年八月に、橋川は単独で江南に一年滞在し、東晉の人である陶淵明の遺跡を訪れている。このとき彼はついでに蘇州にも赴き、湖南の学者である葉德輝を訪問した。⁽²⁰⁾もちろん橋川の訪問は唐突で無礼なものでもなく、また頗みとするところがなかつたわけでもない。なぜなら葉德輝は日本人の弟子を少なからず受け入れており、塩谷温や松崎鶴雄などがおそらく二人の間を取り持つたと考えられるからである。⁽²¹⁾また、一九二五年に橋川に長子が誕生すると、特別に柯劭忞に頼んで命名してもらつていていることからも分かる通り、態度や傾向からも、橋川は中国の老輩学者たちに敬意を払っていた。

旧学の学者への敬仰は、橋川が知人を紹介する際にも表れている。元来あまり人と交際しないことで知られる王国維は、一九二五年に清華国学院で教授をしていた。このとき北京にいた橋川は、北方の学術界が王国維の学問を尊敬しているのを目の当たりにし、王との交流を深めた。大連満鉄図書館で漢籍部主任を務めていた橋川の友人松崎鶴雄は、王国維の学問を敬慕しており、北京を訪問するついでに橋川に面会の取次ぎを願い出ている。

この他、橋川が独力で編纂し北京で発刊した『文字同盟』からは、より明確に彼の中国伝統の旧学に対する憧れが窺える。目録学者である顧廷龍の「新版『文字同盟』を読んで」には、次の二節がある。

顧みれば、私は一九三〇年代に、笈を負うて当時の燕京に行き、そして図書館や友人の書齋を訪れる折々に、この『文字同盟』を目にすることができました。『文字同盟』は、老友である橋川時雄先生が独力で編集発行されたもので、その中の記事は中国の老輩達の著述が多くを占めています。つまり、橋川先生は中国の伝統的な学問を広め、伝えることに多大な力を傾け注がれたわけであります。⁽²²⁾

『文字同盟』は断続的に五年間続いたが、一九二〇年代後半の排日風潮の中で出版され続けたことは、同雑誌に肯

定的な意義を付与している。すなわち、『文字同盟』は日本の学術交流を促し、両国がよく理解し合い、認識しあうための媒体となっていたのである。同時期に北京で出版された『国学月報』の評論には、「日本人は支那学を修めるなどを好むが、まだ中国の学者と広く交流できていない。その理解するところは、真実とは程遠い。漢文や漢語に造詣の深いものは多くなく、かつ彼らの大半は学者ではないのだ」と書かれている。換言すれば、日本人は中国の学問を研究する際、中國学者と交際することに重点を置かなければならなかつたのだ。『文字同盟』はまさにこのような欠点を補い、日本人が誤解から生みだした戦禍を匡そうとするものだつた。

以下の評論も、橋川個人が果たした、架け橋としての役割と功績を賞賛している。

この雑誌（『文字同盟』——筆者註）はすでに第十号を出し、内容の豊富なる一二語の尽し得るところではない。然もその趣旨は自ら宣明せる如く、「両國士大夫の詩文應酬、往昔鴻儒の遺文現代學芸両界にあつて小補あらんとする」といふにある。もし多く正式論文學芸消息を載せたらむには、蔚として學界の重鎮たらむことを期して待つべきである。その第四号王靜庵先生の特別号の如き、読者の最も参考すべきものであろう。⁽²⁴⁾

『文字同盟』からは橋川の、中国における學術情報に対する十分な関心が窺える。先の引用文中の王国維を記念した特別号とは、京津地区における王の身投げの追悼である。この特別号によつて、『文字同盟』は注目されるようになつた。さらに、橋川は積極的に中國人学者の文献を蒐集している。ここでは二つの事例を紹介したい。一つ目は、羅振玉が刊行した『海寧王忠毅公遺書』を、『文字同盟』がすぐ新書紹介に取り上げたことである。同記事には橋川自身の紹介文も添えられ、「聞くところによれば王氏の友人は本書に採録できなかつた分を、別巻にまとめるつもりであり、私はそれを切望している。また王氏の門人が、上海で王氏がものした『自叙』を見ており、もし速やかに印刷・配布できるならば、批評に裨益するところ大である」と記された。⁽²⁵⁾ このように、『文字同盟』は積極的に新しい情報を発掘したのである。橋川のかかる努力は、北京の學術界に廣く知れ渡り、著名な学者である陳寅恪すら重視せざるを得なかつた。二つ目は、王国維の身投げから程なくして、王国維の遺稿中に沈曾植の墓碑銘の一文（「沈乙庵先生七十壽序」）と思われる（筆者註）が引かれてゐるのを陳寅恪が聞き及び、自ら橋川に書簡を出して抄録を取り寄せてくるよう望んだ件である。⁽²⁶⁾ 橋川の広範囲にわたる文獻資料の蒐集は、當時中国の一流の学者も認めていた。

一九二〇年代から一九三〇年代にかけて、橋川は記者の肩書きと、中国の伝統旧学を慕う一貫した心情、さらには

文献蒐集の努力を通じて、華北の政治、文化圏のなかで豊かな人脈を築き、実力を備えた。中国に暮らした二十八年間、橋川は日本人識者の言う「中国の学者との交遊が広い」という点では、現代の第一人と称するに足る人物⁽²⁷⁾だった。

特に日本側が進める「対支文化事業」が破局に近づいた際、橋川は政策の継続・実施のための無二の候補者として急浮上した。外務官僚である岡部長景は、以下のように橋川の人となりを描いている。

当地ニ於テ文字同盟ト称スル月刊雑誌ヲ發行セル橋川時雄ハ、漢学ノ素養モ相当ニ有之、且ツ勤勉篤実ニシテ当地著名ノ支那学者トモ広ク交際シ居ルカ故ニ、從来本邦ヨリ當地ニ遊歴シ來ル觀察家ニシテ支那学者ニ接触セントスルモノハ、概々橋川ノ紹介ニヨルコト多

ク……、将来東方文化事業ノ進行上並ニ支那学者ト連絡上ニ就テモ亦、同人ノ助力ニ待ツモノ多々可有之ト存候……。⁽²⁸⁾

一九二九年、すでに中国に十年住んでいた橋川は、当初「庶務担当」として東方文化会の活動に関わり、一九三一年十月の瀬川浅之進の辞職以降、東方文化会の全権を掌握了。三九歳のときには「総務委員署理」に就任し、会務

改革の責任を負つたのである。

二、統修四庫全書提要の編纂とその挫折

統いて、橋川時雄が進めた文献整理と調査事業について考察する。本節ではまず『統修提要』を取り上げたい。

一九二八年五月に山東で濟南事件が発生すると、中國民衆は憤激し、次々と「反日会」が組織され、抗日感情が高まり日貨排斥が起つた。両国の外交は殆ど停滞状態に陥る。このような世論の圧力のもと、中國側の委員は一方的かつ全面的な辭職を決定し、東方文化会から脱退した。その後同会は日本単独で運営されるが、一九二九年一二月、南京国民政府教育部は「対華文化協定」の廢止を発令し、会の解散を要求した⁽²⁹⁾。しかし、東方文化会の調査事業は依然として日本単独で続けられた。その最も重要な成果が『統修提要』の編纂だった。

『四庫全書』の統修に関する議論は清末からすでに始まっていたが、一九二〇年代に中國官界と民間において『四庫全書』の影印がたびたび計画されたのに伴い、さらに統編を求める声が高まつた。日本を代表する東方文化会はこのようない時局において、實際の行動から統修事業に参与した。しかし、注意を要するのは、南京国民政府が協定を废止する以前より、中村久四郎が外務省の支持を得て関連著

作を書いており、中国の学術に関する調査や書籍などの出版事業は、続修の編纂が初めてではなかったことである。⁽³¹⁾

ただ、東方文化会による続修の事業は、人数・規模いずれにおいても稀に見るものであった。これらの状況をより深く理解するには、「地の利」と「人のつながり」という要素を検討する必要がある。

まず「地の利」についてである。橋川が責任者を務めた人文科学研究所は、明清以来政治・文化の中心となつた北京に置かれていた。民国に入つて出版事業の中心は徐々に上海や江南各地へと移つたが、北京の書店は中国文化界の要地であり続けた。大学教授にせよ青年学生にせよ、ある領域の伝統的な文献や典籍を手に入れる際には、まず北京で探したものだつた。⁽³²⁾ 一九二五年に東方文化会が北京に設置されたのも理由があつてのことと、「地の利」は無視できないものである。

多くの史料が示すように、当時北京の出版業は一時活気を失つたが、日本人はなお積極的に様々な典籍を蒐集していた。一九二六年、胡適は陳垣に宛てた書簡で、大いに愚痴をこぼしている。

北京は現在困窮の極みにあるが、最近の書店の売れ行きはいかがであろうか。聞くところによれば、日本人がいて何とか商売ができるといふ。むしろ北京の

書籍売買は、現在何人かの日本人によつて成り立つてゐる状態である。哀れなことだ。

胡適の歎息は決して荒唐無稽なものではない。珍しい古籍を奪い合うことは、常に日中文化界に緊張をもたらしてきた。例えば一九三一年、北京琉璃廠のよく知られた書店である文友堂は、山西から購入した明万曆刻本の『金瓶梅詞話』一冊をめぐつて大騒動を引き起こした。北平図書館が先に情報を耳にし、購入を申し出たが、文友堂の店主はそれを煙に巻き、日本人に高値で売ろうと考えたのだった。

結果的にこれは公憤を招き、何者かが「愛國鋤奸」という札を爆弾の上に貼り、書店の入り口に置き警告した。店主は身に災禍がありかかつてくるのを恐れ、最終的に千八百万元でそそくさと交渉を成立させた。日本側が広く古籍を集めたという例は、東方文化会が「地の利」を備えているという説明を強めるものである。そのほか、友人が橋川に宛てた手紙のなかには、傅斯年のために趙万里が『詩經広詁』の返却を求めている一通が含まれている。⁽³³⁾

二つ目の「人のつながり」の要素も、東方文化会が「四庫」の続修を進める鍵になつてゐる。日本の「在支特別研究員」以外にも、かつて多くの中国研究者が続修事業に協力していた。例えば倫明はその蔵書で有名な人物だが、清代文献への関心を持ち続けていた。⁽³⁴⁾ 彼は一九二一年に『続

修提要》の編纂を提倡し、十人がかりで取り組めば一、二年で完成すると述べた。⁽³⁸⁾ 倫明の考えは一九二五年に梁啓超の評価を得て、『続四庫提要』の編纂を清華国学院創立の企画とした。その条件は恵まれたものだつたが、最終的になぜか未完成に終わつてゐる。⁽³⁹⁾

倫明のさらに具体的な統修に対する意見は、一九二七年一月に発表された、「統修四庫全書芻議」の一文に見ることができる。当時はまさに「各国が返還する団匪賠償金は文化事業に充てることに限定する」とされたときであり、倫明が世論に訴えかけたのは深謀遠慮と言える。彼は統修を蒐集、審査、編纂の三つの方法に分けなくてはならず、「三つのなかで、蒐集が最も難しい。なぜなら、蒐集できなければ、審査も編纂もできず、空言に帰してしまふからだ」と強調している。⁽⁴⁰⁾ 多くの事例が示すように、東方文化会は多くの財源を提供して「四庫」統修の推進を後押ししており、倫明は自らその役目を買って出て粉骨碎身したのだった。

そのほか「統修提要」に大いに助力した者として、浙江省金華出身の徐鴻宝がいる。徐鴻宝は若いころに北京大学図書館長、京師図書館主任などの職も務めた。辛亥革命後には魯迅と同じく教育部に勤め、常に二人で京師図書館建設の企画を協議し、書籍市場に赴き書籍を購入した。そし

て京師図書館勤務時代には、書籍市場に現れた多くの孤本を買戻してその名を馳せた。注目すべきは、徐鴻宝は長きにわたつて伝統的な典籍と文献に注目し、多くの日本人留学生と知り合つてゐる点である。その一人に吉川幸次郎がいる。さらに吉川は徐鴻宝の紹介を通して、清華国学院で教鞭を執る陳寅恪とも面識を得ていた。⁽⁴¹⁾

倫明と徐鴻宝の二人はともに目録学と清代文学に長じており、彼らは東方文化会のため至るところで典籍を蒐集させ、後の『統修提要』の事業に、多くの利点をもたらした。古籍を収集し、保管する目的で、東方文化会の管轄下に「図書籌備處」が設置され、徐鴻宝は同處の主任を兼任し、事務を取り仕切つた。また、『統修提要』の編纂に参与した謝興堯も、北平図書館、故宮博物院図書館、北京大学図書館の他に「なお一か所最大の蔵書を有するところがある。それは東方文化事業総委員会である」と述べ、同会による「購入には主に版本目録学者の徐森玉、倫哲如の二人があつてゐる。……東方（文化会—筆者註）の蔵書はあらかたこの二人の手によるもので、彼らが集めた書籍はすべて素晴らしい。北京の書籍の精美なものを殆ど入手しており、その性質は純粹に学術的な書となつてゐる」と評している。⁽⁴²⁾

近年の研究によれば、『統修提要』の編集作業は大きく三段階に分けられるという。第一段階は書目の作成である。

伝統的な経、史、子、集の四部に図書を分類し、各研究員がまず一部ないしは数部を選定し、その後四か所で「公共図書館および蔵書家の図書目録を公私にわたり集め、提要を作る必要のある書籍を選択」する。⁽⁴⁵⁾ この作業は一九二八年一月頃から始まり、一九三一年六月に終わった。統いて

第二段階の提要の編集作業が始まるが、それは一九四二年一月に終わっている。この作業には合計七一人が参加し、完成した提要は三二九六一篇にのぼる。最後の段階は一九三八年から始まった。主要な作業内容は提要の文章を整理すること、図書目録と原稿を相互に照合することだった。

特筆すべきは、第二段階で生じた変化である。北平人文科学研究所はもともと研究員に提要の編集作業を分担させようとしていたが、濟南事件が発生すると中国側の委員が突然全員辞職した。そのため研究員制度は取り消され、代わりに研究嘱託制度を採用し、特約執筆者の形式で原稿料を支払うことになった。特に一九三三年に橋川が本格的に東方文化会の責任者となつて以降、編纂方法にも変更が加えられる。⁽⁴⁶⁾ まず橋川は、三十歳以下の若い学者に気を配つた。もともと橋川は老輩の学者たちの学問を尊重していたが、彼らを新世代と結合させる重要な認識した。ヨーロッパでの留学経験がある人物と、彼らによつてもたらされる研究領域や研究方法の創造を、特に重視するようになる。

そして地域も北京に限らず、各地の学者を多数招聘して執筆に参与させた。⁽⁴⁷⁾

第二段階についてもう一点注目に値するのは、「方志提要編纂處」の設立である。その視線は、方志（地方史）が日本の対中政策に必要であるという、「実用」上の目的に注がれていた。⁽⁴⁸⁾ このように橋川が『統修提要』の編纂方針を変えた背景に、環境や時流の影響があることを否定できない。それは、例えは歴史地理学の勃興が、日増しに激化する日中両国との間の闘争に呼応していたのと同様であり、顧頽剛が中心となつて刊行した『禹貢』はその典型といえる。⁽⁴⁹⁾ 吳豊培は、以下のごとく体験を記している。三十年代に、顧頽剛は『小方壺齋輿地叢鈔』の紹介に関する文章を書くよう吳豊培に依頼したが、そこでは学術規範を守り、引用元を必ず明らかにし、毎篇約二百字前後とすることが求められた。このようなやり方に、吳豊培は恐らく一人の力量では遠く及ばず、執筆しきれないのではないかと感じた。⁽⁵⁰⁾

続いて、人物の変遷の意義を明らかにする。橋川は提要の編纂に学者を招く際、特殊な領域のもの以外は、主に北平図書館（以下「北図」と略す）の資料と人脈を活用していった。⁽⁵¹⁾ 一九三〇年代の北図の前身である北京図書館は、清末の京師図書館の規模を概ね継承している。すなわち、同

館は書籍の選書から、目録作成、収藏、貸借までを専門的に全て行う機構であるだけではなく、相当規模の学術調査機関をも備えていた。常駐の主任と館員の他に、専門の編纂委員や図書の整理に従事する者もいた。その中で、向達、賀昌群、劉節、謝國禎、趙万里、王重民、孫楷第などは、すべて後に名を馳せる、當時若かりし学者たちである。⁽⁵³⁾

北図と燕京大学の関係は密接で、多くの燕京大学の学生に提要を執筆させ、原稿料を支払い、生計を維持させた。例えば一九三四年七月二十五日、学生である馮家昇の生計のために、鄧之誠は橋川を訪問し、「『方志提要』と日本留学の手当について問うて」いる。翌日の日記には、「橋川が来た。……馮家昇、譚其驥の兩人と直接話し合い、「方志提要」を作る約束をした」と続く。⁽⁵⁴⁾ この記述から分かるように、鄧と橋川の個人的関係をもとに、燕京大学の学生が執筆チームに加わったのである。そののち譚其驥は、新たに北平図書館内で働き始めた。そして燕京大学の学生でない謝興堯を、事業に参加できるよう推薦している。しかし相違点は、謝興堯個人の身分にあった。『悠悠長水』は以下のように述べる。

譚其驥も何篇か提要を書いたが、現存する提要のなかで彼の名を記しているものすべてが彼の手によつて書かれたものではなく、友人である謝興堯などが書いた

ものである。彼らは北図の職員ではないから、執筆に参加できなかつたのである。譚其驥は自分の名義で彼らに書かせ、原稿料を獲得させたのだ。⁽⁵⁵⁾

つまり、名前を替えて代筆した者が少なからずおり、名を騙つて偽作したケースも多かつたことが分かる。

これらの提要の執筆への参与を願い出た人は、旧知の推薦による者以外は、大部分は生活に迫られたものだつた。⁽⁵⁶⁾ 例えば、橋川は「支払いの十日前に原稿を提出する」と原稿料支払の方法を明確に定めていたが、執筆者の一人である鹿輝世は、橋川に手紙を書き寛大な処置を求めている。彼の理由は、端午の節句が近く、生活費が必要であるといふものだつた。⁽⁵⁷⁾ このようなケースは、他にも存在したと思われる。盧溝橋事件勃発に及んで、日中両国は戦争に向かって突き進み、日常生活は自ら困難を増した。したがつて生活のために、密かに日本人の編纂事業に参加するのも、致し方なかつたのである。

もちろんこのよだな事業への関与は、世論から「文化漢奸」「売国賊」という誹りを受けるのを避け難くしている。しかしそ中には、仕事は「政治と関係を有さない」という姿勢で、自らの長所を發揮し、「不忠不義」の責めを甘んじて受け、提要の編纂に参与した者もいた。例えば楊樹達は、橋川と戰前から付き合いがあり、日中の外交問題に対する

態度は確固たるもので、手加減もしない人であった。あるとき楊樹達は東方文化会の招きで、湖南の歴史文化について講演をしている。そのとき彼は明末清初の大儒学者である王夫之を例に挙げ、湖南人は民族主義に篤く、微妙な言葉遣いに深い道理が含まれており、聞こ者が「敏感に察知するのを望んだと述べた。⁽³⁹⁾ つまり楊樹達の「愛国」心は、提要執筆を断る理由にはならなかつたのである。一九三六年、華北の情勢が日増しに緊張した際、東方文化会は楊樹達に二部の『漢書』の提要を執筆してほしいと強く求めた。楊は「それは私の専門の学問である。この機会に故事を復習できるし、このことは政治と関係ないので承諾し、ゆえにこの文章をものした」と記している。⁽⁴⁰⁾

他に提要執筆を受諾した人物の劉節は、後に自己弁護に代えて、編纂に参加した理由を以下のように述べている。
「當時日本人が依頼を求めたときに、私は一人の年長者に相談した。彼は文章を書いて原稿料をもらうことは何ということもない、しかし他の秘密案件を抱えることはできないと語った。提要はすべて一般的な書物について作るのだ。国防機密ではないし、多くの書を読み多くの文章を書くことができ、そのうえ原稿料ももらえる。なぜこれに関わってはならないのか。日本人が我々の民族的立場を損なうときに事業から脱退する

とき楊樹達は東方文化会の招きで、湖南の歴史文化について講演をしている。そのとき彼は明末清初の大儒学者である王夫之を例に挙げ、湖南人は民族主義に篤く、微妙な言葉遣いに深い道理が含まれており、聞こ者が「敏感に察知するのを望んだと述べた。⁽³⁹⁾ つまり楊樹達の「愛国」心は、提要執筆を断る理由にはならなかつたのである。一九三六年、華北の情勢が日増しに緊張した際、東方文化会は楊樹達に二部の『漢書』の提要を執筆してほしいと強く求めた。楊は「それは私の専門の学問である。この機会に故事を復習できるし、このことは政治と関係ないので承諾し、ゆえにこの文章をものした」と記している。⁽⁴⁰⁾

この話は、善悪相混じり合つた矛盾する感情を表出している。すなわち、愛国心の前で躊躇しつつも、生活を維持するために、劉節は事業に参加した。そしてその後、罪から逃れたいがために正当化している。劉節とその年長者の態度は、徘徊しているようで非難を招くかもしれないが、先の楊樹達と比べると、学術と現実政治の間に揺れる、執筆者の選択と心理状況をより明白に表していよう。

この『統修提要』作成の文化事業は、北京に止まらず江南にも及んだ。⁽⁴¹⁾ しかし文献蒐集については、一九四一年の真珠湾攻撃後、日本の総動員体制のもと挫折を強いられている。「国防文化」の提唱を前提とされたため『統修提要』の事業はついに中止を余儀なくされた。中国科学院に所蔵されている史料によれば、一九四二年一月にも二四〇編の原稿を受け取った記録があるが、もはや事業継続は困難になつていたと考えられる。⁽⁴²⁾

三、中国文化界人物の調査

現在日本の東洋文庫に所蔵されている『統修提要』編纂の資料には「書目紀録」があり、そこには執筆者が原稿を提出する際の様子が記録されている。同記録中のやりとりから判断するに、提要の編纂には踏まえるべき規定があつ

のも、遅すぎはしないだろう⁽⁴³⁾。

た。その中で注意すべきは、「存命者の著述は採録せず」の一項である。⁽⁶⁵⁾つまり、「続修提要」が所収する典籍は、世を去った歴史人物の著作を主としていた。これは必ずしもすべてに当てはまるわけではないが、我々に橋川時雄の意図の所在を理解させてくれる。すなわち、「続修提要」は日本の対華「学術調査」の一つではあるが、歴史文献について採録したに過ぎないのだ。学術の現状調査については、橋川のもう一つの重要な著作である『中國文化界人物總鑑』を取り上げなくてはならない。

先述の通り、橋川は当時の日・中両国の学術状況に相当精通していた。橋川は当時の学者に關係するあらゆる文献を重視しているだけでなく、隨時彼らの消息を記録している。例えば『文字同盟』を主に編集していたとき、橋川は「京華耆宿伝」というコラムを設け、北京各地の著名人を簡単に紹介した。詳しく見れば、このコラムは他の刊行物と異なり、有名な新進氣鋭の学者を記載しておらず、また当時の高官・要人を過度におだてていないことが分かる。そこで紹介されているのはみな学界の老輩であり、例えば、胡玉縉、齊白石、廖平、陳宝琛、孫雄、金紹城、吳燕紹、王樹枏、吳昌碩、鄭文焯などである。「学術調査」の角度から見れば、「京華耆宿伝」は橋川が老輩学者の思想態度を宣揚する方式であるだけでなく、情報の獲得源ともなつ

ていた。

孫雄を例に挙げれば、記事には以下のごとく書かれている。「十数年来、学校の生徒の多くは政党に利用された。学校教育が衰退して衝突が潜在化することを孫は度々憂い、嘆いてやまない。各大学の学長がしばしば礼儀を尽して招請にきて、正しい学問を主導してくれるよう求めたが、孫はすべて断つた。孫はいつも、人に以下のように語つた。私はそれに対する無関心なのではない。しかし党禍が甚だしく、国全体が狂つたようで、人に教育を施しても、大勢の人が喧騒するのみで効果がない。私は無力なのである、⁽⁶⁶⁾と」。学生運動と政治の関係について、孫は明らかに否定的で、同時代の他の学者の態度と異なっている。真に迫っているこの話の眞實性は、なぜ証明するのが難しいのだろうか。『橋川時雄友朋函札檔案』に所収されている孫雄の書簡より、その理由が窺える。

醉軒先生…先日は先生にお目にかかることができ、大変楽しくお話しをさせて頂きました。私の門人が書いた小伝をここに郵送致しますので御査収下さい。もし『文字同盟』に掲載されることになれば、こちらで五部注文し、出版の際にその代金をお支払い致します。

つまり、實際には門下生が編纂していたのだ。それゆえにこそ、上述のように眞に迫った記述が可能になつたので

あり、これは人に知られていない。

橋川が『人物總鑑』を編纂した際には、「京華耆宿伝」

の教訓が活かされていた。『人物總鑑』の本文は合計八一五頁あり、民国期の文化人が約四千五百人収録されている。その中の四百人は写真も付されており、百年近い中国文 化界の大事年表、中国国内の大学や学院一覧や、海外留学で著名な学校の一覧なども掲載されていて、内容・紙幅両面で「学術調査」の特色を十分に体現している。『人物總鑑』の主旨および重要性については、傅增湘が書いた序文から窺える。

その凡例を見るに、近代人物の内、およそ學問文章、才芸技能を以つて世に知られたる底の人物は、すべて四千五六百名についてその略伝を述べ、その名字、郷里、生卒、年歳、閱歴、著述を挙げて編述されたものである。わが二十余省に亘つて五六十年來の人物がこの一冊子に総攬される。一たびこの書を抜けば、近世人物の消長、風氣の変遷、学術の源流、政教の發展及びその梗概について知ることができよう。

傅增湘は東方文化会で橋川時雄と何年も共に仕事をしており、簡にして要領を得た表現で『人物總鑑』の備える特徴をその序文に記している。しかも本書は「文化界」と題されているものの、實際には、学術・政治・教育を網羅し

ており、近代中国の人物と雰囲気の変遷について大要を把握できる。

『人物總鑑』は一九四〇年十月に出版されたが、ちょうどそれは日中戦争の最中であった。『人物總鑑』の編纂は日本の拡張政策と呼応しており、情報活動の参考となる条件を提供している。人物の参考情報について、例言には橋川の以下のような立ち位置が記されている。すなわち、「その人物が時代性、広い支那のことであるからその人物の地方色、今後どういふ動向に流れてどういふ人物がどこに生きてくるかいふ将来の予想にいたるまで、それはかふいふ人物辞典の編纂から得ただけに実証的認識のもとに収穫し得た新知識となつてゐて筆者には單なる感想に止まらないであろう」と。なお当時、橋川のみならず、東方文化会の南方組織である上海自然科学研究所も、人物情報の蒐集作業を行つていて、新城新藏が一九三七年から一九四一年に上海で刊行した『中国文化情報』は、中国の教育文化を考察した雑誌であるが、そのうち「戰時文芸界と一般文化界の動向」や、「文化界著名人の動靜」の欄は、いずれも人物情報に関連している。

『人物總鑑』は検索のための参考文献であるだけでなく、熟読する価値も有している。より正確に言えば、この書籍を「読解」する意味は、「検索」の効果よりも大きい。例

えある者がそれを「内容が豊富かつ雑多な書」と看做して、少なからぬ誤りを指摘しているにしても、目録学の觀点からのみで、同書の価値を否定することはできない。「學術調査」から見れば、橋川時雄は疑いなく中国文化界に精通しており、日本側に「文化情報」を提供する媒介であった。例えば一九四〇年の「北京の学芸界」⁽²⁾は、安藤更生が編纂した北京ガイドブックとでもいべき書物のために書かれたものが、橋川時雄の実力を余すところなく示している。他方、「人物総鑑」中の典拠のない文章の多くは、おそらく橋川自身が本人と親しいか、長期間付き合つことで心に残つたことを書きとめたのだろう。例えば邵章について、「夏孫桐、鄭文焯、張爾田、邵瑞彭など、相交り、また書法に工ひで北京城門上の榜書で彼の手になるものもある。現に北京に隠棲して詩書を娯しむ」と書かれており、彼の手による墨跡も附されている。⁽²⁾これらはともすると他の資料から実証できるのかもしれないが、しばしば口からの出まかせで、読者に疑惑を抱かせやすい記述であろう。

『人物総鑑』に採録されている各人物の伝記の詳しさが異なる点も、また看過できない。例えば、同書が最も紙幅を割いているのは羅振玉で合計七一行あり、文字数は二千字を超える。郭沫若がそれに続き、合計五八行、文字数は約一三〇〇前後である。蔡元培、王国維、柯劭忞、王樹枏、劉師培、胡適、陳寅恪、梁啟超、徐世昌、孫文、康有為、章太炎などがそれに続く。概して、彼らは橋川と密接な関係や交流のある者で、『人物総鑑』の情報は比較的完全と言える。例えば馮汝珍は、「彼は書をよくし説文金石法帖の学に精しく、其の墨拓を所蔵するもの多い。現に東方文化事業總委員会では金石類の提要統修に従事してゐる」と記され、董康については「彼は屢々日支文化事業に関する提議を発表した。東方文化事業總委員会成立の時も、また民国二十年頃は上海申報に寄稿し、また民国二十七年東亞文化協議会に対しても提携するところがあつた。そして日本支文化事業に対する具体案といふのはいつも出版文化の提携を主張するのであつた」と書かれている。⁽²⁾なお、『人物総鑑』で宗社党と清遺民の記述に、特別留意がなされているのは、「日本が長い間彼らの仕事をしたいと望んでいるから」⁽²⁾であろう。時評と異なり、橋川はこのような人物に対して基本的に同情的な態度、ないしは心配りや追憶の念を持つていた。例えば金梁について、同書には「いま天津に隠居してゐる」とあり、敦崇は「宣統の大婚畢り彼はつひに八里橋に至りて投河自殺す。遺老にして黍離麥秀の歎を抱いて自ら死せるもの、彼に於いて見る」などと記されているように枚舉にいとまがない。⁽²⁾このような『人物総鑑』に採録された人物に対する橋川の距離の取り方は、中国学

術の現状をめぐる觀察を反映したものだと言えよう。

橋川は早くも一九三七年には、一九三〇年の国民政府の遺物古書の南方への移動についての文章を書いているが、そこでは不平をこぼしている。同文ではまず最近三十年の北京の文化事業の進展を回顧し、政教界および人文科学の

変遷について論じた上で、大胆にも「五・四」以後の新旧思想の対立および問題を予測し、旧派は最終的に優勢に立つと述べた。これは日本語で発表されており、読者は日本人を想定していることが分かる。橋川は「文献整理派」もしくは「文献派」の旧学者に意を用いており、文献整理は歴代学術発展の重要な契機であったと見なしている。文献派は主に今までの儒者の成果を踏襲しているからこそ、期待に値するのであり、そのため文末では「古物古書の出現と学術の振興」とはいづれの時代に於ても相関的である」と指摘されている。⁽²⁵⁾

盧溝橋事変勃発後、北京は俄かに日本人の独壇場となつた。北京地方維持会に参与していた橋川は「昌明東方文化」の御旗を掲げ、文献・遺物・図書の整理を要務とすることを強調し、文化人を引き留め、北京再建の方針と青写真にしようとした。⁽²⁶⁾橋川の構想は東方文化会の作業に具体的に表れ、『人物鑑』はその出版後、中国文化人の履歴辞典のような役割を果たした。以下の二つの例から、『人

物總鑑』がいかに重視されたかがよく分かる。まずは、陳衡哲を中心となつて編纂した『支那文化論叢』（一九三二年、*Symposium on Chinese Culture*）を一九四二年に石田幹之助らが翻訳した際、各人の経歷については『人物總鑑』が参照されたことであり、第二には興亞院が一度に三〇部購入し、戦時工作の指南書としたことである。⁽²⁷⁾

結論

一九〇〇年五月一九日、北京の琉璃廠で春季競売会が催された。そこには清内務府の刻版、名家の多くの批校本や蔵書、滿文古書などの他、近現代歴史上の著名人も墨跡も出品され、なかには齊白石が橋川時雄に宛てた書簡もあつた。中国と日本の暦が一対となつてカレンダーを所望するその書簡は、とりわけ衆人の注目を集めた。そこには、一時人々があまり話したがらなかつた過去が書かれている。

日中両国の戦争の蔭で、橋川は常に負のイメージや描写を付与されていた。かつて『統修提要』の編纂に参加した王重民は、橋川は「北京の日本特務の親玉である」と追憶文で述べている。⁽²⁸⁾このような言い回しはむろん「後見の明」に満ちており、事柄によつて人を評価する意味合いまでも感じられる。しかし、もし個人の私的な日記と照合すれば、ともすると実態はその通りでないことを発見できるかもし

れない。鄧之誠の日記によれば、戦争が終わつてすぐ橋川は帰国が決まり、長い年月住んだ国家、多くの人、事、物の名残を惜しく思わずにはいられず、自らの所蔵品を中国の友人に記念として贈ることに決めたと記されている。⁽⁸²⁾ 旧識の間柄であった国民政府の沈兼士が京津地区に「接收」に訪れた際、橋川は東方文化会の責任者として、日本の在華各機関の蔵書について様々な協力をしている。⁽⁸³⁾ その過程に共に関わった顧頊剛も、『淨光經』の刊行本を送られ、日記に謝意を記した。⁽⁸⁴⁾

このように橋川をめぐる私的な交流に関しては、既存の印象を是正する必要がある。同時に、橋川の地位とその意義についても再考すべきである。前述の通り、調査事業はもともとヨーロッパの近代国家による海外植民の際に重視されていた。他方で一九二〇年から四〇年代の中国であつても、統治者は積極的に各種の社会調査と統計事業を行ひ、果ては政府と直接関わりのない政党や学術団体などできさえも、個人的な考察や調査報告を行つてゐる。⁽⁸⁵⁾ 東方文化会は日本の「対支文化事業」の一環として、実際に「学術調査」の任務を負つていた。しかし、『続修提要』であれ『人物總鑑』であれ、橋川が多くの中の文化人を招聘雇用し、彼らの学知を借りて情報資源を獲得したのは、稀に見ることだと見える。日本が「交流提携」を名目とし、

また「東方」を旗印としたのは、ひとつ「文化戦」と看做し得るかもしれない。確かに東方文化会は多くの親日の老輩を招聘し、『続修提要』の編纂方針までも変え、さらに若い学者を雇つて「実用」目的を備えた方志を編纂させ、「學術調査」を中國侵略戦争の体系のなかに組み込んだ。しかしながら、我々はこのよう歴史のほの暗い側面が同時にたらす、もう一つの遺産を看過できないのである。

『続修提要』と『人物總鑑』は、日本の「文化戦」の側面だけでなく、実際には後人に多くの肯定的な意義をも伝えている。例えば『人物總鑑』は、二十世紀前半の中国政治・文化・社会各方面の発展と変遷の軌跡を、我々に十分理解させる書籍である。『続修提要』の学術的影響はさらに大きく、中央研究院歴史語言研究所が台湾への移転を迫られた際、台湾に移送する書籍の選択については、「戦後東方文化事業総会から接收された書籍を出来るだけ運び、そしてこれらの書は統四庫提要に採用され」た。今日学界が重視している満鉄調査資料についても、同様のことが言えよう。このように、歴史は常に正と負の両面が共存するという皮肉に満ちており、それは往々にして我々が一概に論じられないものなのである。

(一) Eric R. Wolf, *Pathways of Power: Building an Anthropology of the Modern World* (Berkeley: University of California Press, 2001), pp.69-70.

(2) 王毅『皇家亞洲文獻北中国支倉研究』(上海書店出版社、1999年) 105~149頁。

(3) Stefan Tanaka, *Japan's Orient: Rendering Past into History* (Berkeley: University of California Press, 1993), pp.47-67.

関連する議論については中見立夫「日本の『東洋学』の形成と構図」岸本美緒編『[帝国] 日本の学知』第三卷(岩波書店、1996年) 111~151頁。

(4) 「アジア主義」の東アジアにおける形成に関する先行研究は多いが、近代歴史経験の観点から論じたものとして、葛兆光「想像的・和事際的・誰認同」「亞州」、「台大歴史学報」第三〇期(1991年) 183~1106頁。

(5) 末廣昭「アジア調査の系譜」末廣編『[帝国] 日本の学知』第六卷(岩波書店、1996年) 211~66頁。

(6) 原覚天「近代アジア研究成立史論」(勁草書房、1984年) 11~14頁。

(7) 「橋川時雄先生を偲んで」『東方学回想』VI(刀水書房、1990年) 114~125頁。

(8) 王古魯『最近日人研究中国學術之一斑』(生活書店、1931年) 143~193頁。河村一夫「對支文化事業關係史」

『歴史教育』第一五卷第八号(1967年) 80~81頁。

王樹槐『庚子賠款』(中央研究院近代史研究所、1974年) 418~540頁。黃福慶『近代日本在華文化及社會事業之研究』(中央研究院近代史研究所、1981年) 111~146頁。S. H. Teow, *Japan's Cultural Policy toward China, 1918-1931: A Comparative Perspective* (Cambridge: Harvard University Press, 1999)、岡部洋「対支文化事業」の研究(汲古書院、1994年) 177~111111頁、四四九~四九八頁、山根幸夫『東方文化事業の歴史』(汲古書院、1995年) 111~611頁。

(9) 中下正治『新聞にみる日中関係史』(研文出版、1996年) 1104頁、吳文星「順天時報」「国立台湾師範大学歴史學報」第六期(1978年) 389~438頁。

(10) 曹伯言整理『胡適日記全集』(聯經出版公司、1994年) 第三冊、九〇五頁、1921年10月29日の条。

(11) 魯迅博物館藏「周作人日記(影印本)」(大象出版社、1996年) 中冊、3100頁、1923年3月18日の条。

(12) 胡適「五十年來中國之文學」「胡適文存」(遠東圖書公司、1992年) 第二卷第二集、160頁。前掲東方学会編、119頁にも関連箇所がある。

(13) 前掲『胡適日記全集』第七冊、1110頁、1934年6月111日の条。

(14) 阿部洋『インタヴュー記録E. 日中文化摩擦・橋川時雄氏』(東京大学教養学部国際関係論研究室、1981年) 210~

111頁。

(15) 周昌龍「吳虞与中国近代的反儒運動」『新思潮与伝統』五四
思想史論集』(時報文化出版公司、一九九五年)二八三~三

二五頁。

(23) 顧廷龍「新版『文字同盟』を読んで」『汲古』第二三号(一九九三年)八五頁。
を参照。

(16) 中國革命博物館整理、榮孟源監修『吳虞日記』下冊(四川人民出版社、一九八六年)一二七~一二八頁、一九二三年八月

七日~一四日の各条。

(17) その一例は同前、一六五頁、一九一四年二月二八日の条「橋

川時雄來訪。久保天隨の著作は身の丈に達するほど多く、博文館は大正六年に久保に二〇万元送った、と。また、梁任公は定見が無く、表面的には淡泊だが、心では利を求めていた。その學問もまた極めて雑だ。今日林長民宅で見かけた、と。

さらに、橋川の妻がもうすぐ化石橋中街に住む予定であり、その際は日本料理を振舞いたい、と」。

(18) 同前、一七五頁、一九二四年四月一〇日の条。

(19) 「讀者俱樂部」『順天時報』一九二三年八月三十日、一五頁。

(20) 橋川時雄の葉徳輝訪問については、木下李太郎『支那南北記』(改造社、一九二六年)二五〇頁を参照。

(21) 塩谷温は葉徳輝から曲学を学び、松崎鶴雄は小学を学んだ。

葉徳輝によると、彼はそれらの學問を「中國で絶学となるものを作成するため」日本に伝えることを望んでいたのだとう。李慶編注「葉徳輝与諸橋轍次の筆談(一九二〇年)」『東瀛遺墨』(上海人民出版社、一九九九年)一六三頁。

(22) 長子の命名については、橋川淑『夫人の追憶』今村与志雄編『橋川時雄の詩文と追憶』(汲古書院、二〇〇六年)四六八頁

(24) 「新刊書籍雑誌提要附出版預告」『文字同盟』第一一號(一九二八年)一六頁。本記事は『國學月報』からの転載である。

(25) 「函箋・沈子培尚書墓誌銘」同前『文字同盟』四七頁。この書簡は『陳寅恪集・書信集』(三聯書店、二〇〇一年)には採録されていない。

(27) 長瀬誠「日本之現代中國學界展望(下)」『華文大阪毎日』第二卷第八期(一九三九年)一七頁。

(28) 「文字同盟社主橋川時雄補助ニ関シ稟請ノ件」、外務省記録『文化設施及び状況調査関係雑件 在外ノ部』所収、阿部前掲書、四六二頁。

(29) 王樹槐『庚子賠款』五一〇頁。

(30) 李常慶『四庫全書』出版研究(中州古籍出版社、二〇〇八年)八二~九三頁。

(31) 王古魯編著『最近日人研究中国學術之一斑』二六七頁。

(32) その一例として、中國医学の文献の叢書で著名であった陳存仁が挙げられる。陳存仁『銀元時代生活史』(上海人民出版社、二〇〇〇年)八九頁。

(33) 陳智超編注『陳垣來往書信集(增訂本)』(三聯書店、二〇一一年)一七七頁。

(34) 雷夢水『為了保存古籍』『書林瑣記』(人民日報出版社、一九

八八年)一一頁。日本人が莫大な資金で書籍を購入した例は多い。例えば一九三〇年、日本の漢学者である藤塚鄰は五百元で『浮溪精舍叢』の一部を購入し、孫殿起に深い印象を与えていた。

雷夢水「琉璃廠堂故拾零」『中国典籍与文化』一九九二年第三期、二二一頁。

(35)「趙萬里致橋川時雄信」「橋川時雄友朋函札檔案」(中国国家図書館館藏、未刊)。

(36)例えば稻葉岩吉の長男で、東京帝国大学文学部支那哲学科の稻葉誠一は、その顯著な例である。外務省記録H5.7.06-2「在華本邦特別研究員関係雑件／補給実施関係 第11卷」(アジア歴史資料センター、Ref. B05015647600、外務省外交史料館)。

(37)倫明を熟知する友人である鄧之誠は、倫が命のようく書籍を大切に扱い、清代の人物の書を集めていたと記している。鄧之誠『清詩紀事初編』(中華書局、一九六五年)序、一頁。

(38)これは倫明が陳垣に行つた建議である。陳智超編注『陳垣來往書信集(増訂本)』四二頁。

(39)雷夢水「附・倫晉如與孫耀卿書」「書林瑣記」九四頁。梁啓超の清華国学研究院への企画内容については、吳天任編著『民国梁任公先生啓超年譜』(台湾商務印書館、一九八八年)一六五三頁。

(40)倫明「統修四庫全書芻議」。郭伯恭『四庫全書纂修考』二四三頁より転載。

(41)吉川幸次郎著、錢婉約訳『我的留学記』六一頁。

(42)外務省記録H.3.10.3「北京図書館関係雑件 第1卷」(アジア歴史資料センター、Ref. B05015173500、外務省外交史料館)。

他に、羅琳「『統修四庫全書総目提要』(編纂史提要)」「図書情報工作」一九九四年第一期、四八頁。なお王古魯による「図書籌備處の中国委員には、もとむと湯中があたつていた」。

王古魯、前掲、二六八頁。

(43)謝興堯「北京藏書概略」「堪隱齋隨筆」(遼寧教育出版社、一九九五年)二二一頁。

(44)羅琳「『統修四庫全書総目提要』(編纂史提要)」四九〇五〇頁。

(45)薩仁高娃整理「有關『統修四庫全書総目提要』的通信」『文獻』二〇〇六年第三期、一六九頁。

(46)執筆範囲や原稿料、編纂順序や著作権、各日各月に編纂する上限などが変更された。外務省記録H.6.20.5-4「東方文化学院関係雑件／統修四庫全書編纂事務関係 第1卷」(アジア歴史資料センター、Ref. B05015913100、外務省外交史料館)。

(47)橋川時雄「四庫全書提要統修の概要」、今村、前掲、四六八頁。原文は一九四〇年に刊行された。阿部洋、前掲、七五〇頁も参照。

(48)郭永芳「『統修四庫提要』纂修考略」「図書情報工作」一九八一年、第五期、一九頁。

(49)顧頽剛の日記(一九三四年)の各所に、この状況に関する記述が見られる。例えば『禹貢』の最大の顧客は日本人で、東京でも『禹貢』は注目されていると書かれている。『申報』

の切り抜きからも明らかである。顧頌剛『顧頌剛日記』（聯

経出版公司、二〇〇七年）第三冊、二六九、二七四、四九三

～四九四頁。

(50) 吳豐培「王錫祺與『小方壘齋輿地叢鈔』及其他」馬大正、吳

錫祺、葉於敏整理『吳豐培邊事題跋集』（新疆人民出版社、

一九九八年）三八六頁。

(51) 例えば清史館の館長である趙爾巽は、西藏の部分に執筆者が

いなかつたため、蒙藏の研究で名を馳せた吳燕紹のもとにた

びたび赴き招聘している。吳豐培「吳燕紹先生与他的蒙藏史

研究」前掲『吳豐培邊事題跋集』四〇五頁。

(52) 袁同礼「国立北平圖書館概況」袁同礼ほか編著『中国各省市

公私圖書館概況』（中山圖書公司、一九七一年）四〇五頁。

(53) 葛劍雄『悠悠長水』（華東師範大學出版社、一九九七年）五

六頁。

(54) 鄧之誠著、鄧瑞整理『鄧之誠日記（外五種）』（北京圖書館出

版社、二〇〇七年）第一冊、一三五～三六頁。

(55) 葛劍雄前掲書、五五頁。ほかに、謝興堯「記大高殿和禦史衙

門」「堪隱齋雜著」（山西古籍出版社、一九九八年）二四～二

五頁。

(56) 例えば羅繼祖が提要作成に参加しているのは、彼の祖父が羅

振玉であつたためである。羅繼祖「日本人統修『四庫全書總

目提要』問世」「社会科学戰線」一九九八年第四期、一五七

頁。

(58) 外務省記錄H31.03「北京圖書館關係雑件 第三卷」（アジア歴史資料センター、Ref. B05015174300、外務省外交史料館）。

(59) 楊樹達『積微翁回憶錄』（上海古籍出版社、一九八六年）一〇〇頁。

(60) 同前、一一一頁、一九三六年二月一二日条。

(61) 劉顯曾整理『劉節日記』（大象出版社、二〇〇九年）四頁。

(62) 一九三九年に藏書家の劉承幹は生活に困窮したため、自ら苦労して集めた嘉業堂の藏書を売ろうとし、満鉄と上海同文書院が積極的にこれに関わった。大連方面の松崎鶴雄が劉の許

しを得て、藏書を四十万円で譲渡しようとしたが、上海同文書院が軍部の介入を背景に、書籍の大連への移送に反対する。松崎はこれを悲しみ、橋川に東方文化会の名義で斡旋するよう要請した。橋川は燕京大学の劉文興を派遣し、上海に帰省する際に劉承幹を訪問させ、さらに翁方綱の『四庫提要』の原稿数ページを写しとらせている。張廷銀、劉応梅整理『嘉業堂藏書出售信函（上）』『文献』二〇〇二年第四期、二四六頁。

(63) 原一郎「北支に於ける邦人の文化的活動狀況」「東亞研究」第六五号（一九四三年）一七四頁。

(64) 「東方文化事業總委員會檔案」（中國科学院圖書館藏）、羅琳「『統修四庫全書總目提要』編纂史提要」五〇頁。

(65) 吳格「日本東洋文庫藏『統修四庫全書總目提要』編纂資料」張伯偉編『域外漢籍研究集刊』第三輯（中華書局、二〇〇七

八頁。

年) 四〇一頁。

(66)「京華舊宿伝（五）」「文字同盟」第三号（一九一七年）一一

頁。

(67)「孫雄致橋川時雄信」前掲『橋川時雄友朋函札档案』所収。

(68)傅增湘「中国文化界人物總鑑序」橋川時雄編纂『中国文化界

人物總鑑』（名著普及会、一九八二年、復刻版）。

(69)同前、例言、三頁。

(70)梁容若「評『中国文化界人物總鑑』」「談書集」三一九頁。

(71)橋川時雄「北京の学芸界」前掲『橋川時雄の詩文と追憶』四

六～五八頁。

(72)橋川、前掲、一四一頁。

(73)同前、五六二～五六三頁、六二四～六二五頁。

(74)梁容若、前掲、三一六頁。

(75)橋川、前掲、二五七、五九五頁。なお、橋川が敦崇の没年を

一九一一年としているのは誤り。

(76)橋川時雄「支那学界の趨勢と北平文化の崩壊」『滿蒙』第一

八年第一号（一九三七年）二一五頁。

(77)橋川時雄「北京文化の再建設」「改造」臨時増刊号（一九三

七年）一〇～一七頁。

(78)石田幹之助監訳『支那文化論叢』（生活社、一九四二年）凡

例三頁。この書籍は太平洋問題調査会がもともと編纂したも

ので、中国学術界の一流人士による各専門分野の議論が網羅

されている。例えば、蔡元培、胡適、丁文江、朱啓鈴、李濟、

趙元任、陶孟和、曾宝蓀など。

(79)阿部インタヴューメモ、前掲、九七～九八頁。

(80)田志強「古籍善本待入誰家」「人民日报（海外版）」1100111

年五月六日、第七頁。

(81)王重民「悼楊樹達先生」「冷廬文數」（上海古籍出版社、一九

九二年）二七五頁。

(82)鄧之誠著、鄧瑞整理『鄧之誠日記（外五種）』第三冊、五〇

三～五〇七頁。弟子の雷登と陳垣に、橋川は鄧之誠への贈り

物を預けた。鄧之誠は「劫後秋花豔」という詩を作つて贈り、

謝意を表している。今村編、前掲、一六九頁。

(83)松崎鶴雄「北京の文化人」杉村英治編『吳月楚風』（出版科

学総合研究所、一九八〇年）一七四頁。

(84)顧頽剛、前掲、第五冊、六一九頁、一九四六年三月四日条。

(85)以下の研究を参照のこと。Yung-Chen Chiang, *Social Engineering and the Social Sciences in China, 1919-1949* (New York: Cambridge University Press, 2001); Tong Lam, *A Passion for Facts: Social Surveys and the Construction of the Chinese Nation-State, 1900-1949* (Berkeley: University of California Press, 2011).

(86)方豪「[緯修四庫全書提要] 鄭記（一）」「書目季刊」第五卷
第四期（一九六六年）七八頁。